

組織目標評価報告書（令和4年度）

部局名：

惑星物質研究所

部局長名：

芳野極

目標・取組		目標・取組の達成状況(成果)及び新たに生じた課題等 (部局での検証とそれに対する取組)
①教育領域		
	関連する 年度計画の番号	教育領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<ul style="list-style-type: none"> 大学院自然科学研究科改組に向けて、地球惑星物質科学専攻(5年一貫制博士課程)からのブループラネットコースへの移行に伴い、国内外の優秀な学生の獲得のための広報活動を積極的に行う。 専攻長と協力して学生ワーキンググループを主催し、今後の学生獲得方針、支援体制について検討し、学生数維持または拡大のための具体的な方策をまとめる。 英語による授業、演習、ゼミナールを実施する。 国際的研究・教育の推進と次世代研究者育成を目的として長年継続してきた国際インターンシッププログラムの再開に向けて方策を検討する。 新型コロナウイルス感染症の感染拡大予防策を徹底し、在学生の健康を守りながら、安心して学習・研究を続けることができるように支援する。 学生相談員等による学生に対するサポートや、ハラスメント防止、メンタルヘルス推進に関する取り組みを積極的に行い、健全な教育研究環境を構築する。 	<ul style="list-style-type: none"> 5-1-1,9-1-3 9-1-1,9-1-2 5-1-1 9-2-1 11-1-3 11-2-3 	<ul style="list-style-type: none"> 大学院自然科学研究科地球惑星物質科学専攻(5年一貫制博士課程)において、コロナパンデミックの中で、海外から1名の留学生の入学が実現した。また、5名の留学生が博士学位を取得し、3名が進学試験(3年目)に合格した。 国の制度を先取りし、海外からの5年一貫制博士課程学生全員に対して、RA及び奨学金の支給により研究に専念できる環境を提供したほか、住環境やビザ取得などのサポートを行った。 新型コロナウイルス感染症について、キャンパスの状況にあったきめ細かな予防策の徹底により、第7波までは所内での罹患者を一人も出さずに、学習・研究のペースを落とさずに継続することができた。第8波においても学生罹患者を出すことはなかった。 全ての授業、演習、ゼミナール及び研究指導を英語で実施し、国際的な研究・教育を実施した。 学生教育WGを開催し、新研究科ブループラネット特別コースについて検討を行った。 授業ハイフレックス化のため講義室等の整備を行った。 コロナ禍による入国規制が緩和されたことに基づき、来年度三朝国際学生インターンシッププログラムの開催を決定し、公募を開始した。 学生獲得のためのアウトリーチとして、研究所紹介動画を作成した。
②研究領域		
	関連する 年度計画の番号	研究領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<ul style="list-style-type: none"> 地球惑星物質の分析・実験の技術開発を行い、世界最高レベルの地球惑星物質科学研究を展開し、優れた研究成果を輩出する。 科学研究費補助金の採択率を高めるため、積極的に大型科研費獲得が可能な人材を採用する。 共同利用研究数の増加を支援するため、高度技術人材であるスーパーテクニシャンを補充し、コロナ禍で来所困難な状況においても代行実験が可能な研究体制を整える。 次世代の若手研究者育成のため機関研究員を国際公募により採用し、組織の活性化を加速する。 JAXAが実施しているはやぶさ2サンプルリターンミッションによる小惑星リュウグウから持ち帰る試料の総合分析を実施し、優れた研究成果を公表する。 CASTEM24Remote事業による共用機器の産業利用を推進するとともに、アカデミックな新部門の設立に向けた改組を検討する。 共同利用・共同研究拠点として、新型コロナウイルス感染対策を講じた上で、国外の国際共同利用研究者の受け入れを開始する。 第4期の始まった段階であるが、共同利用・共同研究拠点の第5期の拠点の将来構想に向けたシード作りを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 8-1-1 8-1-1 8-1-1,12-2-1 8-1-2,9-2-1 8-1-1 8-2-1 8-2-4,8-1-2 8-1-1,8-1-2,12-2-1 	<ul style="list-style-type: none"> 地球惑星物質の分析・実験の不断な技術開発を行い、世界最高レベルの地球惑星物質科学研究を展開し、17編の査読論文を発表するなど、優れた研究成果を輩出した。特に小惑星リュウグウの試料の総合分析結果に関する論文を日本の他研究機関に先駆けて発表できたことで、国内外から大きな反響があった。 科学研究費補助金の応募率・採択率を高めるために、科研費採択経験のない若手外国人研究者に重点を置き、3名の添削を実施した。所内会議等で外部資金獲得が重要であることを認識させたことで、本年度の教員の科研費応募率は100%であった。しかし、科研費の採択にはつながらなかったことは来年度に向けて大いなる反省点となった。 文部科学省の共同利用・共同研究拠点(令和4年度より「惑星物質科学拠点」として認定更新され、半年ごとに大学や研究機関に対して公募を行った。特に緊急を要する共同研究がある場合は、随時申請を受け付けた。新型コロナウイルス感染症の感染拡大により影響を受けている研究者を積極的に支援するため、通常の来所による受け入れのほか、来所が困難な研究者に対して、本研究スタッフによる実験・分析の代行による共同研究を実施した。このような取り組みにより、本年度実施した共同利用・共同研究の件数(37件、うち7件は代行、14件は国際共同研究)は、昨年度(24件)を上回った。 若手、外国人、女性研究者およびスーパーテクニシャンなど、博士号を持つ多様な研究人材を配置し、基盤強化を戦略的に行った。 共用機器の産業利用を4件実施した。
③社会貢献(診療を含む)領域		
	関連する 年度計画の番号	社会貢献(診療を含む)領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<ul style="list-style-type: none"> 鳥取県、三朝町との連携を積極的に推進し、地域社会へのアウトリーチに積極的に取り組む。 中国地方の高校生向けの講演や施設見学受入を積極的に実施する。 地球惑星科学に親しんでいただくように、一般向けの展示室の充実に取り組む。 国際共同教育研究拠点の推進の一環として、国際共同研究や海外機関との連携等の実施により、学生の交換留学や国際貢献を積極的に推進する。 	<ul style="list-style-type: none"> 14-1-1 14-1-3 14-1-3 8-1-2,14-1-3 	<ul style="list-style-type: none"> 鳥取県知事への報告など、小惑星リュウグウの分析結果が各種報道で取り上げられた。 三朝町キュリー祭に併せて、在日フランス大使館、日本原子力開発機構等から研究所視察があった。 おかやま夢育イニシアチブイベントで展示を行った。 アウトリーチの一環として、徹底したコロナ感染対策を講じた上で、科学技術振興機構(JST)のさくらサイエンスプログラムによるタイ王国カセサート大学学生の視察を受入れ、本研究所教員による講演及び実験室の見学を実施し惑星物質科学の研究拠点紹介を行った。 鳥取県さじアストロパークで開催の「星取県をしよう(R4.6-9月)」にて、研究所施設・研究パネルを展示した。9月までの期間中、約2千人の来場があった。 フランスのクレルモン・オーヴェルニュ大学との研究交流を促進するため、主幹部局として大学間協定の更新のほか、新たに研究とスタッフの交流に関する附属文書を締結した。また、米国内ハイ大学及びJAXA宇宙科学研究所との部局間連携協定をそれぞれ更新した。 国立大学共同利用・共同研究拠点協議会HPで公開される研究紹介動画を作成した。 ●知の拠点【すぐわかアカデミア。】すぐにわかる小惑星リュウグウの起源と進化 https://www.youtube.com/watch?v=OChoE9h2eyI
④管理運営領域		
	関連する 年度計画の番号	管理運営領域における目標・取組の達成状況及び新たに生じた課題等
<ul style="list-style-type: none"> 全所員が希望を持って取り組める研究所の将来構想を、外部委員の意見を取り入れて戦略的に策定するとともに、リーダーシップを持って研究所をまとめ、中期計画を着実に遂行する。 ダイバーシティ推進のため、ウーマンテニュアトラック教員制度を活用して極端に女性教員比率の少ない状況の改善に取り組む。 教員の年齢構成を踏まえた中長期的な人事計画に基づき、積極的に若手教員の人事を推進し、若手教員がすぐに主体的に活躍できるように研究環境を整えるためのスタートアップ支援を行う。 科研費獲得状況の改善、共同利用件数の増加のための意識づけを考慮した部局予算編成を行う。 新型コロナウイルス感染症に対するリスク管理を行い、感染防止と研究教育活動の両立に努める。 PR動画の作成、ホームページの充実、ニュースレターの発行等の広報活動により、研究所運営・活動の「見える化」を促進する。 共同利用・共同研究のオンライン申請の導入を検討する。 	<ul style="list-style-type: none"> 14-1-1 11-2-3 9-2-1 8-1-1,8-2-1 11-1-3 11-2-2 15-1-3 	<ul style="list-style-type: none"> 研究所将来構想について、外部委員等、所外、学外者の幅広い意見を得ながら、長期的なビジョンを基に検討を行った。 所内会議では、会議時間が昨年度に比べては増えたものの、それ以前に比べては大幅に短縮(教授会平均時間:R4年度:77分、R3年度:45分、R2年度:121分、R1年度:176分)を実現し、研究所の将来構想や人事協議について建設的な議論を進めることができた。 外国人教員等が研究所運営に参画し、フルに活躍できるように、所内資料の英訳や、英語・日本語の両方を使った会議の進行など、Diversity & Inclusionを実践してきた。 衛生管理者や産業医による定期的な職場巡視、化学物質の適切な管理など、職場の安全衛生の推進および法令遵守の徹底を図った。コロナ流行期には三朝地区独自の対応フローを日英版で整備した。 研究所の展示室の内容の充実、研究所ニュースレター(日本語・英語)の定期的な発行(年2回)、学会(日本地球惑星科学連合)へのオンライン出展(日本語・英語)等により、研究所運営・活動の国内外での「見える化」に努めた。 新規共同利用研究者、学生獲得のためのアウトリーチとして、研究所紹介動画を作成した。 ●岡山大学惑星物質研究所紹介YouTube https://www.youtube.com/watch?v=UQtAxdYGI0k&list=PLJikPQTwoCj6pTUCAjao-Rv8JtAlN6fEK 次年度WTT教員受入部局となり、WTTの採用が確定し、本学のダイバーシティ推進に貢献した。 共同利用・共同研究のオンライン申請導入についてJROISと打ち合わせを行い、検討を行った。 R5年度の三朝国際学生インターンシッププログラムの申請をオンライン上でできるようにGoogle formを用いて行った。

注1) 本様式全体が1ページに収まるよう作成してください。

注2) 自己評価による達成度(5~1)は非公表項目とし、組織目標評価結果を公表する際に消去します。